

商務印書館と夏瑞芳

沢本 郁馬

商務印書館の歴史を振り返ってみると、文芸物出版の印象が強烈で、あたかもはじめから文芸専門出版社であったかのような錯覚を覚える。1903年『繡像小説』、「説部叢書」、「林訳小説」、1910年『小説月報』、「文学研究会叢書」と、たしかに充実した文芸雑誌、文芸書を発行し発展していったのだが、その発展の基礎には教科書出版の成功があったことを忘れることはできない。

1897年、印刷所として出発した商務印書館が、おりからの新式学堂開設の趨勢を敏感に感じ取り、教科書出版に乗り出したのだが、その時の範は日本に求められた。この商務印書館の求めに応じたのが、当時日本で最大の教科書出版会社であった金港堂の中心人物原亮三郎である。原亮三郎は、もぢまへの教育に対する関心から個人的に商務印書館に投資することとし、社員加藤駒二、小谷重を経営方面に、また教科書疑獄事件で有罪（1903年）となった元高等師範学校教授長尾雨山を編訳所に派遣した。1903年より10年間の商務印書館・金港堂の日中合弁時期である。

創設より8年間に出版した新書は全134種、350冊で、そのうちの翻訳物は敵復訳のものを除いて大多数は日本語からの翻訳あるいは日本語からの重訳であったという。¹⁾ この一事をもってしても、日本からの影響がいかに大きかったかが理解できよう。

別に掲げたのは商務印書館の資本金と営業総額の推移表である。グラフを見れば、辛亥革命前後に少々停滞が見られるが、その営業の発展の急激なことが

1) 王雲五『商務印書館与新教育年譜』台湾商務印書館 1973. 3. 14—38頁。

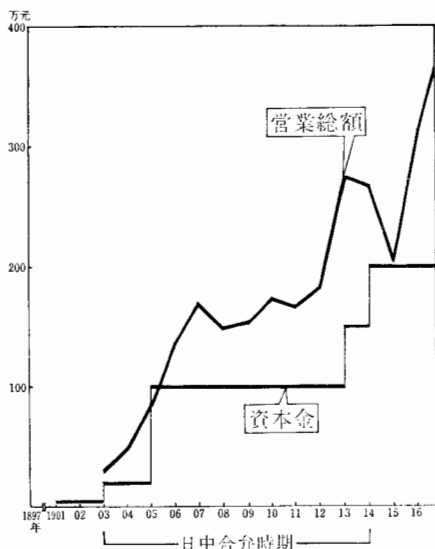
一目瞭然であろう。それはちょうど金港堂との合併時期にあっており、故に商務印書館隆盛の基礎を形成したのが、この日中合併時期だというのだ。

商務印書館の社運がますます隆昌である一方、金港堂は1902年暮に発生した教科書疑獄事件により蹉跌し、その後、活動は沈滞していく。落ち目の金港堂がなぜ隆盛一方の商務印書館との合併を解消したのか。実藤恵秀は、「日本の持株を如何なる条件で回収したか、日本の株主は何故に隆盛に赴きつつある該書館の株を譲渡した

かは大に研究に価すると思ふが、私には未詳である²⁾とされており、樽本照雄も「合作の経緯、その解消の理由等、中国側の資料からも、日本側の資料からも、その詳細は必ずしも明らかにされてはいない³⁾と述べている。また、樽本は初期商務印書館について記述しながらも、創設者の一人である夏瑞芳に関してはよく調査をせず、王雲五『商務印書館与新教育年譜』により、彼の名を瑞方、上海美華書館の職員であるとする。その一方で、茅盾の「商務印書館編訳所生活之一⁴⁾に基づき、粹方、『字林西報』の植字職工長としてどちらか判断をつけないまま注にそのことを掲げている。

ところが、中国社会科学院近代史研究所李新・孫思白主編『民国人物伝』第

商務印書館の資本金と営業総額の推移



王雲五『商務印書館与新教育年譜』(台湾商務印書館 1973. 3)より作成

- 2) 実藤恵秀「初期の商務印書館」『日本文化の支那への影響』螢雪書院 1940. 7. 5 所収。248頁。
- 3) 樽本照雄「金港堂・商務印書館・繡像小説」『清末小説研究』第3号 1979. 12. 1. 74頁。
- 4) 茅盾「商務印書館編訳所生活之一」回憶録〔一〕『新華月報』(文摘版) 1979. 1. 『新文学史料』1978年第1輯にも収録。

1巻（北京中華書局 1978. 8）には、ちゃんと夏瑞芳の項（熊尚厚執筆）があるのだ。私は、この熊尚厚の文章を下敷きにしながら夏瑞芳について述べ、金港堂、商務印書館の合併解消の原因についてひとつの仮説をここに提出するつもりだ。

夏瑞芳，字は粹芳，江蘇青浦県の人，1871年に生まれる。父は上海董家渡の露店商，母はアメリカ籍牧師の家で保母をしていた。1882年夏，母に従い上海にやってくると長老会清心堂南市小学に入学，卒業後清心書院に進学する。1889年，同仁医院の看護人となり，1年後，英商『文匯報』館で植字を学ぶ。1894年，英商『字林西報』館の植字工に転じ，その後英商『捷報』館で職工長となる。

夏が植字を学んだという『文匯報』館の『文匯報』（The Shanghai Mercury）は，イギリス人クラーク（J. D. Clark），リビングトン（C. Rivington）が1879年4月17日創設したもので，上海の重要晩報のひとつである。次の『字林西報』（North China Daily News）は1864年7月1日，上海の船舶と商業ニュースが増加したことにより『北華捷報』（North China Herald）より別に発行され始めた日刊紙で，上述『捷報』というのはこの『北華捷報』（1850年8月3日創刊，上海で歴史，影響力ともに最大の英字新聞）のことであろう。⁵⁾

1897年2月，夏は植字工鮑威恩・鮑武昌・高鳳池らと合計3750元の資金を出し合い，上海に商務印書館を設立し，英美聖經会および広学会等のために教会書籍を印刷することになる。イギリス人がインドの学生用に編集した英語教科書に中国語の注釈をつけた『華英初階』（English and Chinese Primer），『華英進階』（English and Chinese Readers）を印刷販売することを思いつき，それに成功したというのも，植字工として一貫して英字新聞に関係していた夏の経験と，今の時代に何が要求されているのかを見通す彼の洞察力に負うところが多かったのではなかろうか。

1900年，日商修文印刷局を買収する。

5) 曾虛白主編『中国新聞史』台湾 1966. 4 初版。1977. 3 四版。164—166頁。戈公振『中国報学史』香港太平書局影印本 85—87頁。

英語読本1種類のみで継続の教科書編纂が不調なことで、大部の『日本法規大全』の出版で経営が思わしくなくなるや、1901年、南洋公学訳書院院長張元濟と上海閘北紗廠(紡績工場)主人の印有模(印錫璋か)等を経営陣に迎え、資本金を5万元に増資し商務印書館を株式会社に改組した。夏は総支配人となる。

1902年、全国に学校を設立することを命じた学堂章程(いわゆる欽定学堂章程)が公布されると、夏は教科書が必要となることに着目し、商務印書館の中心業務を学校用図書を出版することに定め、印刷所を建設、編訳所と発行所を附設し、愛国学社の蔡元培を招き編訳所長に任じる。1903年、蔡が「蘇報案」で離職すると張元濟を所長にすえ、金港堂と合併するや資本金を20万元(日中で折半)に増資し、長尾雨山、小谷重らの協力のもとに『最新初等小学国文教科書』を出版する。数ヶ月のうちに全国に行き渡り10万余冊も売れたという。

学堂普及と教科書の急需を結びつけることが出来、その教科書作制では日本最大の規模を有する金港堂との合併を決断したことを見ても、夏のすぐれた透察力をうかがうことができるであろう。

夏の卓越した点は、時代の趨勢を見抜く力だけでなく、①技術革新、②需要の開発、③同業者との競争になみなみならぬ力を発揮したことである。

まず、①印刷技術革新について例挙してみる。

1900年 中国で始めて紙型を使用した修文印刷局を買収。

1903年 日本人技師前田乙吉、大野茂雄を招聘し写真網目銅版を導入。

1904年 日本人柴田を招聘し彫刻黄楊(ひめつげ)版を導入。

1905年 日本人技師和田鍋太郎、三品福三郎、角田秋成を招聘し彫刻銅版を導入。同じく和田、細川玄三以下8人を招聘し彩色石印を導入。

1908年 平版印刷機を導入し、技術指導のため日本人木村今朝男を招聘。

1909年 アメリカ人スタッフォード(Stafford)を招聘し写真銅版の改良。

1912年 電気メッキ銅版を導入。

1913年 ライノタイプ(自動活字鑄造機)を導入。

実藤恵秀は、「この昌言報、はじめの三冊は、全く時務報時代と同じ印刷であるのが、第四冊となつて、俄然面目を一変する、三号活字が四号となつて、しかも従来よりも鮮明な感じを与える。活字のよいためである。よく見ると、

この号から、目録の横に『上海北京路商務印書館代印』とある⁶⁾と述べられているような鮮明な印刷というのも、商務印書館の不断の技術革新によっているのは言うまでもない。日本人技師が多く招聘されているのも金港堂との関係であろう。

次に、②需要の開発というのは、全国主要都市に分館、支館を設けたことと教育事業の振興である。

1903年、漢口分館設立を手はじめに、1905年北京、天津、1906年瀋陽、福州、開封、潮洲、重慶、安慶、1907年広州、長沙、成都、済南、太原、1909年杭州、蕪湖、南昌、黒竜江、1910年西安、1913年保定、吉林、1914年南京、衡陽、貴陽、香港と分館、支館を増加させていった。

教育事業の振興とは、小学師範講習所、尚公小学校、商業補習学校、芸徒学校、養真幼稚園、師範講習社等の設立である。

全国主要都市に分館を設け、教育事業を興し、はたまたその学生を対象とした雑誌、『教育雑誌』(1909年創刊)、『少年雑誌』(1911年創刊)、『学生雑誌』(1914年創刊)等を創刊すると独創的な販路拡張方法を考案している。

『教育雑誌』は1909年十二月二十五日に創刊され(創刊号天理図書館蔵)、主編は桐郷の陸費逵(後に陸が商務印書館をとび出してからは、朱元善が主編となる)、月刊、定価1角である。本雑誌を刊行する目的は、教育を研究し学務を改良するためだ、と言い、改良のためにはまず全国の教育状況を調査しなくてはならない、そこで、学堂の名前と住所、中学・高小・初小の別、官立・公立・私立の別、創立年月と創立者・校長の姓名、第何学年に学生は何人か、どういう科目があって誰が担当し、使用している教科書は何か、といった項目に答えた一覧表と、切手2角6分を同封して商務印書館編訳所内教育雑誌社に送ると、『教育雑誌』2冊を1年間無料で贈るというわけだ。これにより該雑誌は全国の小学校のある場所にはすべて読者を持つようになった。と同時に、これは今でいう市場調査であり、教科書制作販売を主要な業務としている商務印書館にとっては、実態把握のための有力な手段となったに違いない。

6) 2)と同じ。

もうひとつの工夫というのは、投稿を歓迎し採用分には商務印書館の図書券を進呈するというものだ。修身・読本・作文・算術・歴史・地理・理科等の部門に分けて、それぞれの教授法を懸賞募集し当選者に1等10元、2等5元、3等3元の図書券を送るとある。現金ではなく商務印書館の図書券というところがミソだ。

『少年雑誌』(1911年二月創刊、未見)は、はじめ主編孫毓修がほとんど一人でできまわしていた。当時ロンドンで出版されていた“Children's Fncyclopaedia”(『児童百科全書』)を手本にし、国内外の歴史物語、寓話、科学趣味と国内外の出来事の解釈、紹介等々を内容としていたらしい。この雑誌でも投稿原稿が採用されると、該当雑誌を1冊と、図書券を贈るきまりとなっており、主編が朱元善にかわってもその規則は変わらなかった。⁷⁾

『学生雑誌』は、ごちゃまぜの、とにかく中学生に課外知識を与えることを主とした刊行物だった。社論式の短論があり、内容は一貫して学生に勉学を奨励し、将来祖国のために尽力することを勧めるものだったらしい。外国の科学知識を紹介する「学芸」欄等を除いてあとは学生の投稿が占め、その投稿の大多数が文言の遊記、詩、詞であった。主編朱元善を手伝って投稿を選考したのが矛盾なのだが、矛盾の言うところによると採用に関してふたつの点で創意工夫がこらされていた。その1. 投稿には何省何県、何校、何学年誰某と明記する。採用されれば当の学校・教師・学生は名誉に感じ、会う人ごとに誇れば、それが雑誌の拡販につながる。その2. 採用原稿には現金ではなく2元から10元までの図書券を贈呈する。しかも、商務印書館出版物に限り使用可能なもので、これが商務印書館の書籍の拡販にもなる、⁸⁾ というわけである。後者の図書券を送るというのは、明らかに『教育雑誌』『少年雑誌』の方法を踏襲したとっていいだろう。たしかに『学生雑誌』の創刊号(1914. 7.20天理図書館蔵)の広告を見ると、論説・学芸・修養・学校状況・通信問答・記載・文苑・

7) 謝菊曾「《少年雑誌》の変遷」「涵芬楼往事」所収 『隨筆』叢刊第7集広東人民出版社 1980.4 62頁。

8) 茅盾「商務印書館編訳所生活之二」回憶録〔二〕『新華月報』(文摘版)1979.2 159頁。『新文学史料』1979年第2輯にも収める。

小説・英文翻訳・挿画の全部門について、大々的に投稿を呼びかけているし、おまけに、希望するならば著者の肖像写真も文章と一緒に印刷するとあり、投稿者の自己顕示欲を一層くすぐっている。当選者には本雑誌を贈る、商務印書館の図書券、或るいは文具券を贈るとするのは矛盾の述べる通りである。あとの雑誌も推して知るべしで、その創設者にしてその後継者あり、といったところか。

三つめの、③同業者との競争は、1904年北京直隸書局を買収して京華印書局と改名させたこと、もうひとつは中国図書公司のことである。⁹⁾

中国図書公司は、印刷業の有利なところに目をつけた上海の大資本家席子佩と福州の大商人曾少卿によって1906年に設立された。

曾少卿¹⁰⁾といえば、アメリカにおける中国人労働者排斥を目的にする「華工禁約」に反対し、上海での米貨ボイコット運動の中心人物として有名である。

中国図書公司が興隆するのを見て、水が池に集まるように投資者があられわれ商務印書館の強敵となるや、¹¹⁾ 夏はある手をうった。夏が中国図書公司に対抗して取った手段というのは、株価操作による乗っ取りのようだ。熊尚厚は、その間の事情を、「夏は秘密裏に株を買い付けると割り引いて投げ売りし、図書公司の株主が続けて資金を出せないようにさせた」と記している。一方、費行簡編『近代名人小伝』(1918, 今, 台湾印本による)の夏粹芳の項には、夏が人を使い中国図書公司の株を割り引いて売るといふ広告を新聞に出させ、それをいぶかり驚いた株主は資金を出すのを停止し、投資しようとしていた者も二の足をふんだ、と書かれている。どちらが事実か、というよりもたぶん夏はその両方を行なったのだろう。いわば火のない所に煙を立てる強引なやり方であ

9) 商務印書局が合併した書店として、中国図書公司と中外輿図局をあげているものもある。陳伯熙編『上海軼事大観』上海泰東図書局 1924. 2 六版所収「商務印書館創業之歴史」参照。

10) 林健司「曾鑄について」『中国文芸研究会会報』21 1979.12. 2 参照。

11) 中国図書公司の書籍発行点数を阿英『晚清戯曲小説目』(上海古典文学出版社 1957.9)によって調べると、創作が1908年1点、翻訳1908年4点、1909年2点だけであり、文芸面では商務印書館の足もとにも及ばない。「強敵となる」とは、教科書方面でのことである。『小説林』第9期(1908年正月)には、小学堂用書・中学及師範学堂用書・参考宣講用書に分類し、『初等小学修身課本』をはじめ22種の教科書の広告が掲載されている。

る。また、同『近代名人小伝』の曾少卿の項目に、「(曾少卿は) 商務印書館に日本資本が多いのを聞き、自ら株式を募集し別に書局を始めたが、最後には陰謀にかかり、いま一步のところまで失敗する」と述べられている。独立を尊ぶ曾の気性が知られると同時に、当時、すでに外国企業との合弁会社に対する反撥が社会に芽生えつつあったことが注目される。曾の側からしてみれば、夏の陰陽にわたる株価操作というのはまさに「陰謀」にはかならない。夏の辣腕家としての面目躍如たるものがある。また、それくらいアクの強い人物でなければ、一個の印刷所にすぎなかった商務印書館を全国最大規模の近代印刷企業に育て上げることなどできなかつたであろう。しかし、また彼の強気な性格は彼自身を滅ぼす一因ともなるのだ。

買収された中国図書公司是、名義をそのまま残して、¹²⁾ 商務印書館のいわば替玉出版社として使われたらしい。というのは、商務印書館にいたという謝菊曾という人物の回憶に、民国初期に流行した『礼拝六』派の小説雑誌として『小説海』を、『小説月報』とは別に出すために中国図書公司の名義を利用したことが述べられているからだ。¹³⁾

1906—11年にかけて中国経済界の混乱に拍車をかけたのは、都市に頻発した経済恐慌であった。その原因は、「基本的には一九〇七年のニューヨーク恐慌の影響、銀相場の暴落、過剰貿易、国内的には信用の濫用、銅元(銅貨)、鈔票(紙幣)の濫発など旧式銀行制度の欠陥等に発して」¹⁴⁾ いた。パニックは、1906年に1回、1908年3回、1909年3回、1910年8回、1911年5回という回数で多さで発生している。夏が巻き込まれたのは1910年六月のゴム恐慌(一名、陳逸卿事件)で、ポットの『上海史』では「ゴム景気」として次のように紹介

12) 熊尚厚は、買収後、中国和記図書公司と改名したという(293頁)が、『小説海』の奥付には中国図書公司和記となっており、熊の言う通りではない。しかし、「和記」を加えているのを見れば、改名は改名であろうか。

13) 7)と同じ。57頁。もうひとつ、「説部叢書」に関連して、中国図書公司名義を使ったものが一件あると書いている。『隨筆』叢刊第6集1980.2。82頁。

14) 菊地貴晴『現代中国革命の起源』巖南堂書店1970.4.5。136—137頁。中村哲夫氏にご教示いただいた。

されている。

「一九〇九——一九一〇年に上海は有名なあの『ゴム景気』に見舞われた。この景気は六、七ヵ月つづき、約三十五の地元ゴム会社株が、上海株式取引所に上場されて約二千万両の資本を吸収し、それどころか更に莫大な金額が地元市場を通じてロンドンの会社の株に投資された。それは乱暴な投機時代であつた。この破綻は一九一〇年の六月の決算期にやつて来た。そして上海にあつた二、三のおもだつた支那人銀行、錢莊その他の大手筋は店を閉めねばならぬ破目に陥つた」¹⁵⁾

夏は商務印書館の資金をこのゴム株式に投機していたため、具体的な数字はわからないが莫大な欠損を出してしまったらしい。

それに加えて、1911年の辛亥革命により各省は続々と独立し、各地の分館が本店に送金しようにもそれが出来ず、商務印書館は資金の欠乏に対処できなかった。夏は、部分的に編集人と現場労働者を解雇する一方、宝興里の不動産を処分したり錢莊に借金をして欠損を埋めざるを得なかった。

さらに追い討ちをかけるように、館内の陸費逵(伯鴻)、戴克敦、陳協恭、沈知方¹⁶⁾らが、1912年1月商務印書館をとり出し、中華書局を創設すると、商務印書館に戦いを挑んだのだった。

辛亥革命が起こると、陸費逵は、清朝が倒れ共和政府が成立する、そうするとそれまでの教科書は使われなくなり、これは自分が新しい書店を興すよい機会だと考えた。そこで、沈頤、戴克敦ら数人の同僚を糾合し、毎日仕事がお終わった後、大いそぎで新時代の精神に適合する高等小学および初等小学用の教科書を編集、ひそかに印刷をしておく。その一方、陸は『教育雑誌』で掌握している(陸が主編なのだ)全国各地の小学校調査表を利用して、今でいうダイレクトメールを送りつけ、新教科書を見本として同封、大々的に宣伝し採用を呼びかけた。同時に、新しく組織した中華書局の発行所も棋盤街に建物をさがし出し借りる。中華民国が成立すると、ちょうど全国の学校は春の開校に当って

15) ポット著土方定一・橋本八男訳『上海史』生活社 1940.11.20. 268頁。

16) 「出版大事年表 1862—1918年」張静廬輯註『中国近代出版史料二編』上海群聯出版社 1954.5 所収。433頁。

おり教科書の採用に苦慮していたところ、中華書局の新時代の教科書という大規模な広告が各新聞に出現し、全国教育界の歓迎を受け注文が殺到する、ついに商務印書館が長年壟断していた教科書の分野は大半が奪われてしまった、という。¹⁷⁾

陸費逵という人物については詳細がわからない。1886年生まれ、18歳の時武昌で教師をした経験があり、昌明公司の上海支店の支配人、文明書局で2年弱、商務印書館で3年強仕事をしている。『教育雑誌』は創刊が1909年だから、陸が入社と同時に手掛けた雑誌ということになるろうか。時代の趨勢を見る眼を持っている相当有能な人物であった。また、編訳所の責任者高夢旦には、彼は長く人の下に居る人間ではないとも見られていたらしい。高は自分の姪を陸に娶わせ、彼に長く商務印書館のために力を尽すよう希望したが、それを振り切って独立し、これより中華書局は商務印書館の宿敵となった、とも謝菊曾は書いている。そうなると両書店は、近親憎悪的關係で結びつけられていたと言ってよく、その事情を知っていれば中華書局の商務印書館に対するすさまじい攻撃の実態を見せられても、何となく納得がゆくのである。

中華書局の商務印書館に対する攻撃は、商務印書館に日本資本がはいっているという暴露から始まった。茅盾は、「辛亥革命の時、中華書局が立ち、完全中国資本で出版事業を自ら行なうことをスローガンにし、商務の中日合資の事実を暴露した」¹⁸⁾と書き、熊尚厚は、「陸費逵等はまた新聞紙上で商務と日商の合併関係を暴露した」と述べている。新聞紙上での直接的な暴露記事を、今、さがしあてることが出来ない。これは今後の問題として残しておくことにして、中華書局が設立と同時に創刊した『中華教育界』を見てみることにしよう。

『中華教育界』創刊号(1912. 1. 25 編輯者汪濤、京都大学附属図書館所蔵)は、その表紙に日の出をあしらい、「教育革命」「中華万歳」と対聯風に印刷する。広告には、『共和国民読本』『中華初等小学修身教科書、教授書』等13種の教科書がズラリと紹介されている。巻末にある「中華書局宣言書」によると、

17) 中華書局独立の経過は、謝菊曾「《教育雑誌》的變遷(附陸費逵創弁中華書局経過)」『隨筆』叢刊第7集59頁による。

18) 4)と同じ。

「立国の根本は教育にあり、教育の根本は実に教科書にある。教育が革命されなければ、国基はついに鞏固とならず、教科書が革命されなければ教育の目的はついに達成されることを得ず」に始まり、中華書局の宗旨が4個条大きくかかげられる；

一、中華共和国の国民を養成する、二、人道主義、政治主義、軍国民主義を採る、三、實際教育を重んじる、四、国粹と欧化を融和する

続く各教科書の編集大意には、たとえば『中華^{初等}修身教科書編輯大意』では、「本書は中華共和国の完全なる国民を養成することを宗旨とする。独立自主自由平等を経とする。公德私徳国民科を緯とする」が大書され、以下同じように「中華共和国の完全なる国民」「独立自主自由平等」が繰り返し、くりかえし述べられるのだ。清朝崩壊、中華民国成立が、「独立自主自由平等」というスローガンを作り出した背景であるとは容易に想像できるにしても、こうもしつこく反復されると、商務印書館が日中合弁会社であり、それは「独立」したものではない、という暗に批判した文句でそれはあると受け取りたくもなってくる。

向振武は、創刊号に掲載された「民国の学校関係諸君につつしんで告げる」という論文において、大略（つまり、意味の取れない部分はスツとぼして、という意味。樽本調になってしまった。ドーモ、イカン）次のように述べている。清朝が学校を興した主旨は、忠君の奴隷を養成するにほかならず、故に独立自主自由平等の思想は輸入することが出来なかった。われらは、異民族専制の毒を受け、政治は悪く、生計は窮迫し、人権は喪失し、生命は危険であるが、しかし、これらはすべて教育専制の毒のひどさには及ばない。教育専制は聡明さを窒息死させ、その奴隷根性を深め、自立思想を絶った。「もっと残酷なのは、近年の学部および民間の編集した教科書にすぎるものはない」忠君を提倡し、立憲を頌揚し、はなはだしくは民権を邪説といい、革命を醜惡の言と称し、われらを永遠に異民族の奴隷にさせようというものでしかなかった。「民国の教育は、共和の国民を養成するものであり、決して蛮族に忠実な奴隷を養成するものではない。だから着手する方法は、まず教科書を改正することにある。民国に出版者あり、もとより勞せず利益を獲得しようとするものである。それが

ないものとするならば、自ら講義録を編集すべきで、清朝の奴隸を養成する教科書を断じて引き続き用いてはならない」(傍点は沢本)

民国以前、教科書は商務印書館のほとんど独占市場といってもいいくらいであったから、傍点をほどこした出版者が誰であるのか、一目見てすぐ了解できたであろう。間接的な商務印書館批判である。教育を宗旨とする雑誌であるから、あまりにも露骨な批判文をのせるわけにもいきまい。

商務印書館の営業総額を見てみると、1907年から1912年まで、国内の政情不安を反映してかほぼ横ばいの状況であったが、1913年には急増している。中華民国成立によって、それまでの不振が一挙に挽回されたかに見えたが、中華書局の創立とそれに続く商務批判であろう、1914年、1915年と急激に落ち込み、1912年ラインまで低落しそうになっている。中華書局の攻撃は、はなはだ有効であったと言えるだろう。

夏瑞芳は中華書局との対抗上、理事会に日本資本を回収することを提案せざるを得なかった。自ら日本に渡り金港堂と交渉を重ね、日本側に有利な条件で1914年ついに日本資本を回収したのだった。

1914年7月20日創刊の『学生雑誌』には興味ある広告が出されている。「完全華商株式 商務印書館 記念図書券敬贈」というもので、日本資本回収を記念したものだ。

縁起

本公司は現在資本180万元を所有しています。以前、日本人が引き受けておりました株式37万8100元は、本年1月、全額を回収し、すでに農商部に上申し登記いたしてあり、新聞に掲載し現在本公司が完出に華商資本の株式会社となったことを布告いたします。特に図書券を発行し教育界に贈り、かつ近来各省においては学費が不足し国民教育に影響なしとは言えず、故に小学教科書を購入される人に対しては特別に贈ることとし、教育を贊助する微意をいささかつくそうというものであります。

商務印書館が金港堂と合併した時、それぞれ10万元を出資しているから、金

港堂所有の株が37万8100元といえればそれから10年間に約3.7倍にふくれ上ったことになるし、総株式のうち21%というのはやはり大株主ということになるだろう。夏瑞芳にしてみれば、ゴム投機に手を出して大損はするわ、辛亥の動乱で資操りが悪くなり不動産を処分したり、人員削減を行なうわ、で決して資金が潤沢にあったわけではなかったはずだ。金港堂にしても、教科書疑獄事件以後、経営が下り坂であったから、多少の混乱はあるとはいえ全体に見れば隆盛にあった商務印書館から手を引くつもりはなかったであろう。お互いの虚々実々の取り引きがあって、それにマルマル2年間で費やしたのであろうとは想像がつくのだ。商務印書館にとって、2年間の時間をかけて金港堂との合併を解消せざるを得なかった最大の理由は、何といても清朝の崩壊と中華民国の成立という時代背景以外に考えられない。「独立自主自由平等」という中華書局のスローガンそのままに異民族の支配から独立し、中国全土に民族主義が高揚した新しい時代にあつては、日本との合併はマイナス要因になってもその逆はあり得なかったのだ。

1914年1月10日、夏瑞芳は陳其美の放った者によって暗殺された。

(さわもと いくま)